オリ主ジオウの逆転ヒロアカ

無個性のソーイお茶書き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

祝え！仮面ライダージオウの力を受け継ぎ、時空を超え過去と未来を知ろしめす時の王者。その名も仮野面太！まさに、生誕（再誕）の瞬間である！

以前書いていたデータが諸事情により飛んでしまったため、同じ境遇の人（友人）と合併して再投稿です。

目次

プロローグ ―― 1
それ本当に俺？ ―― 6
閑話電子とゲイツの楽しい話し合い。 ―― 12
半熱半冷の騎士 ―― 16
俺の…私のオリジン【前半】 ―― 21
俺の…私のオリジン【後半】 ―― 26
私の強くてニューゲーム。俺の決意のコンティニュー。 ―― 33

プロローグ

「変身！」
【ライダータイム】
【カメーンライダー！ジオーウ！】
――――ジオウの力を持ってヒロアカのヒーローとして転生したっ！……のはいいんだけれど…。

「む！くっ殺せと言わせたいヒーローＮｏ．１の仮面ライダージオウじゃねぇーか！」
「マジかよヤラせて！」
「鎧の上からでもイカせてやるよぉ！」
「あたしらの超絶テクニックをお見舞いしてやるぜ！」

「……誰があんたらなんかとするかっ！」
【ジカンギレード！ジュウ！】
【フィニッシュタイム！】
【ビルド！】
【スレスレシューティング！】
ポケモンのロケット団の様な服装のヴィラン達をビルドの白線みたいなあれで挟み、ジカンギレードの引き金を引いた。
すると銃口からデカイ光弾が発射されヴィラン達に激突。
「「おあん！」」
妙な断末魔（使い方あってるか？）をあげてヴィラン達は気絶した。
その瞬間、ワッ！と歓声が響き渡る。

「さいっこうだね！ジオウ様！」
「変身前と変身後で印象が変わるのもギャップがあっていいし！」
「ハァ…ハァ……！今日も、とっても凛々しいわ！」
「あぁ揉みたいなぁ……あのこか…」
「言わせないわ芦戸ちゃん。…気持ちはとっても分かるケロね」

「流石は、我が魔王！」
「ジオウの人気は凄いな。ファンクラブが何個も立ち上がっているし個性もすごい。今じゃ見られなくなった特撮の平成ライダーの力をアーマーとして被ることができる。その事によって様々な災害場所に適応できるしなによりアーマーを被る前から強い。どんな鍛え方をしているんだろう。そういったところは全くメディアに見せてないし秘密の訓練場でもあるのかな。そして何より後天的に個性が発現された世界でもかなり貴重な人でもある……。流石すぎる…！オールマイトと肩を並べても違和感がないっていうけど本当みたいだ。何か弱点はないのかな。あの強さはどこから……（ブツブツ…」

うーん。ここまで来ればもう察しはつくよな？
そう。俺はどうやら、ヒロアカの貞操概念が逆転したところに転生してしまったのだ……！
あ、ヴィランとかも全員女で、ちらっと聞こえた限り、峰田の代わりに芦戸がオープンスケベになっているっぽい。
緑谷は全く変わってないみたいで安心だ。
……そして、最後に一番気になったのは……。

「誰だ我が魔王って言った奴！あとで事務所まで来いよ！今日にな！」

この世界の仮面ライダーはドライブで終わっている筈だから、我が魔王なんてセリフを今の奴らが知っているわけが無い。
なのに我が魔王なんて言ってる奴は絶対なんか知っている筈だ！必ず聞き出してやる！

★

「ひゅー♪ジオウってば以外と大胆だったんですね～！」
「茶化さないで下さい電子」
俺の事務所はとあるビルの最上階となっていて、出動の際は屋上に

行きフォーゼアーマーで空を飛んで行く次第になっている。
今回の事件はたまたまその場に居合わせただけだったけどな。
……さて、そろそろこの女について説明しよう。
『五代譜子（ごだいふぉんこ）。
ヒーロー名電子。個性：テレフォン』
『どこでどんな状況だろうと電話できる個性。主に連絡要員だぜ！』
と、ここまでが公式に発表されている資料。
こっからは個人的に見て判断したものだが……。
・見た目は茶髪のロングにデカイ耳が特徴。
・男への性欲より恋愛の方が上回っている。
・ものっそいウザい。
・原作の芦戸以上に恋愛脳。
・毎晩のオカズはBとLの薄い本（本人談）
・これでも他の女よりましである。
・相手を油断させた上で叩き潰す戦闘方法
ということ。
いろんな意味で腐った奴である。
……ん？まてよ。ここが貞操逆転世界ならBのLは俺たちの世界にとってはGのLってとになるわけで…。
…いや、考えるのはやめとこう。
「だぁーってぇ。あんな公衆の面前で『俺の所に来い！』だなんて…！どんなイケメン男子ですかぁーもおー！女顔負けですね！」
「誤解の生まれる言い分はよしてもらいましょうか電子？」
「はいぃぃぃぃぃぃ！すみませんでしたぁぁぁぁ！どうぞお踏み下さぁぁぁぁぁい！」
「どさくさに紛れて自分の性癖を押し付けるな！お、おい足に縋り付くんじゃない！」
「うへへ…。ジオウのおみ足……！私だけのとっけぇぇぇん」
「キャラ崩れてんぞ！」
絡みつくな足を舐めるな！オラっどけっ！
俺は電子を右足で押しのけた。

「ありがとうございますぅぅぅぅ!!!」
電子は麗らかな笑顔を浮かべている。
……もう嫌だぁ。元の世界に帰りてぇよぉ…。
”コンコン”
ナイスタイミング！いい所に助けが来た！
電子は外面はものっそい取り繕うから誰かが来たら必ず真面目フェイズに移行するし有能に変化する。
「どうぞ」
俺は入室の許可を出して、訪ねてきたのが誰なのかを心待ちにした。
とにかくお礼を言いたいな――――――――
「貴方がジオウね！５０年後の未来で男を全滅させ自分のハーレムを築いた最悪の魔王！お陰で未来の私達は飢えに飢えて……！…兎に角！ここで倒させてもらうわ！」
【ゲイツ！】
――――――――前言撤回！ものっそい面倒な奴が来た！
「変身！」
【ライダータイム！】
【カメンライダ～ゲイツ！】
【ｏｈ　ＮＯ！】
てか、何故ゲイツの力を!?
「さあ！その首貰った！」
と、とにかく応戦を……！
「お待ちくださいお客様？お紅茶を入れましたわ」
「え？あ、ありがとう？」
電子から突如渡されたカップに驚き思わず受け取るゲイツ。…あー何となく察しがついたわ。
（……えっと、電子？…程々に、ね？）
が、そんな俺の思いも虚しく、電子は素早くゲイツライドウォッチを時空ドライバーから抜き取り変身を解除させ、生身になったところ

を狙って一本背負いで床に叩きつけた。
…戦闘訓練でもおんなじことやられた身としては、複雑な気分だが、早々に敵を排除できて良かった…のか？
「ジオウどうしますか？この自分の世界に浸りすぎて帰ってこれない可哀想な子」
「も、妄想じゃないもん！本当に未来から来たんだもん！」
「はっ！甘ったれんな！そんなに捕まってドＭプレイがしたいのか！このど変態め！」
「っ!!!?ちがうわや！」
「動揺しすぎて頭がおかしくなりおったな。さて、この女、どうしますか？……はっ、まさか本当に調教を……？」
「ちげーよ。いい加減脳内ピンクを直せ」
「女である限り無理です！」
「即答するなよ……」
「あと、するならあたしも混ぜてください！」
「本当にやめてくれ…」
これでまだ周りよりマシなんだぜ？
信じられるか？
…まぁ、それは置いておくとして、このさっきから俺の股間をチラチラ見ているむっつりに話を聞くとしよう。

―――――――――――――あ、そうそう、言い忘れてたが。
これは俺がジオウの力使いながら変態から逃げまくり、最善の魔王を目指す物語だ。

それ本当に俺？

「最初はヒーローたちが大勢で倒しにかかったんだけど、全て返り討ちにされちゃって。世界中から資源集めまくって国ごと消し去ろうとしてもミサイルを別次元に送っちゃって……もう未来の私たちには過去を改変するしか方法がないのよ！」

「ほう。でも今は関係ないね証拠もないし警察に突き出しましょう」

「落ち着いてください電子……」

まだゲイツは縛り上げたままだが、一応話が普通に出来るまで２人は落ち着いた……筈。

それにしても、未来の俺すげーな。ヒーローを殆ど返り討ちにするなんて。

いや、レジェンドライダーの力のお陰だろうけども。ミサイルのくだりとか、ヘルヘイムに送ったんだろうし。

…そういえば、この世界の仮面ライダーはドライブまでだったが未来のライドウォッチはどうなっているんだ？

そこんとこ聞いとこう。

「１つ聞くが、未来で認識されている仮面ライダーはなんだ？」

「……奴が持っていた力は『クウガ』『アギト』『龍騎』『ファイズ』『ブレイド』『響鬼』『カブト』『電王』『キバ』『ダブル』『オーズ』『フォーゼ』『ウィザード』『鎧武』『ドライブ』だ」

「あっ、多分そいつ俺じゃないな」

「はっ!?」

いやだってさ、俺、すでに『ビルド』とか『エグゼイド』のライドウォッチ持ってて、ビルドに関してはもう使っているんだよな。

それに、かなり使い勝手がいいし、この先もバンバン使うつもりだから、未来の俺が使わないわけがない。

つまり俺は、最悪の魔王にはならない！

ＱＥＤ！

……と、いうことを懇切丁寧に説明してやったら、みるみる顔を真っ赤にして土下座して謝ってきた。

「すみませんでしたっ！能力が似ているとはいえ、全くの別人を襲ってしまうなんて！許してくださいなんでもしますから！」
ん？今なんでもって……。
「ん？今なんでもって言ったね。なら私と来てもらおうか」
「へ？いやっ、ちょっと引っ張らないでくださ……えっ、どこ連れてくんですか!?」
お、おーい電子さん？ゲイツの襟首掴んでどこ行くんですかー？
「じゃねジオウ。この子の罪は私が与えますから」
「あっ（察し）…助けて仮面ライダーー！」
”バダン”

”……アーーッ！”

「ｏｈ……」
【悲報】ゲイツ、女として色々と大事なものを失う。そして電子は両方ともイケることが判明。
「まともなのは俺だけか」
この世界でまともな女子がまた１人失われた瞬間である。世界は残酷だ。
”プルルルル、プルルルル”
ん、フロントから電話？
”ガチャッ”
「はいこちら仮面ライダー事務所」
《ジオウさんですね？虹色の服を着た女性が『我が魔王に…ジオウに会いに来た』とかほざいていますがどうしますか？》
お、来たな？虹色とか派手だねぇ。
…で、今日のシフトは砂糖知能さんか。
暴言的な発言をするなとは言わないけど公私の区別くらいはつけて欲しい。
「仕事中なんですから汚い言葉を控えましょうよ。…あーそれと、その人は俺が呼んだんです。通してやってください」
《わかりました…あ、なんかもう１人来ましたよ》
「え、もう１人？特徴は？」
はて、今日は何か予定入ってたっけか？
《髪の毛が真ん中で紅白色に分けられた女性のガキンチョっすね》
あーね？あいつか。ＯＫ理解したよ。
「だから言葉使いを…あーもういいや。先に虹の人が終わってから対応するから待たせておいてくれ」
《了解》

”ガチャン…”

……さて、待つか。

★数分後だぜイェァ！

「待たせたな！ドアから勢いよく私が来た！」

”ドバァン！”と勢いよくドアが開かれる。

初っ端からのセリフに面食らったが、それ以上に俺は彼女の顔をみて驚いた。

なぜって？

「――――んでここにいんだよ女神様ァ！」

――――そいつが俺を転生させた女神だったからだよ！

なんでだよ！あんた自分でこの世界は干渉しないとか言ってたのに！

「えへへ…来ちゃった」

「そんな軽いノリで片付けられるかっ!?あんた世界のバランス云々でこっちに来れないんじゃねーのかよ！」

さっき砂糖さんに注意したこともすっぽりと頭から抜け落ちてふざけた事を抜かしているアマに叫んだ。

「キャラ変わったねー。まぁ、女神ちゃん権力あるし？そこんとこをあーだこーだして何とかやって来た！」

「何の為にだよ！世界が崩壊するとかほざいてた癖に！」

「ふ、愛の力に出来ないことなど無いのだ！」

「こんの腐れ恋愛神がぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

「いだだだだ！あ、アイアンクローはやめてぇ！ナイッスゥ！」
「脳みそまで汚れてんな！このドＭがぁぁあ！」
「ハァンッ！」

…その後、２人してしばらく暴れ、互いに話ができるとこまでは平常運転に切り替えた。
まぁ、仮にもお客様な訳だから、珈琲２人前を淹れて片方を女神様に差し出し、自分のは角砂糖を２つほどいれフーフーしながら飲む。
「…で、本当は何の目的でここに来たんです？」
女神様も珈琲を飲んで真剣な顔つきになった。
そして、口を開けて――――
「君に会いに来たのさ」
「よっしアイアンクローの時間だＡｒｅ　Ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ？」
「出来てるよ……！」
「オラァァァァァァァァァァァ！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁあん！キモティィィィィ！」

……どうやらマジでこれだけだったらしく、お肌ツヤツヤにして帰って行きやがった。
「はぁ…。ったく片付けもしないで出て行きやがって」
物が散乱とした部屋を掃除して、もう１人のお客さんのため色々整えた。
〝プルルルル、プルルルル〟
《はい。こちらフロント》
「紅白饅頭女子を通してくれ」
《わかりやした。……ところで、先程内股になりながら恍惚とした表情で出て行った虹色の人と何かあったんですか？》
「お灸を添えた。ただそれだけだ」
《……了解》
「おいなんだ今の間は」
〝ガチャン…〟

「しかも切りやがった…」

フロントにも連絡して、例の彼女をこちらへと呼びたした。…ちょっと腑に落ちないが。

……数分後、〃コンコン〃と控えめなノックかドアから伝わる。

「どうぞ」

「失礼します」

ゆっくりとドアから入って来たのは、原作と殆ど変わらないヒーローコシュチューム（少し伸縮性を持たせた）を身に纏った紅白饅頭こと…。

「力試しさせてくれ師匠…！俺が今、どこまでやれるのかを！」

女体化した轟焦凍！またの名を——

『タドルクエスト』

「レベル2…！変身！」

『ガッシャットガッチャーン！レベルアップ！』

『タドル巡るタドル巡るタドルクエスト〜！』

「頼むぜ師匠……！」

——仮面ライダーブレイブ！

閑話電子とゲイツの楽しい話し合い。

【ｓｉｄｅ　電子】

ジオウと別れた私は、ゲイツとやらを別室に連れて行き、ちょっとしたお話し合いをしていました。

「あっ……がっ、ギィ…!?」

「うーん中々タフネスですねぇ…」

私が個性を使って、脳に性的快楽の電波を送って隠していると思われることを聞き出そうとしても、中々口を割りません。

「もうイク寸前で止められるの２９回目ですけど…吐いちゃった方がいいんじゃないですかねぇ？そしたらひと思いにやっちゃいますから」

私はゲイツを懐柔しにかかります。

一番最初に凄まじい快楽（絶頂）を与えた事で、体はそれを求めて仕方がないはずなのです。

「…へ、へへ…。誰が話すかよ……っ!?」

「あそ、ならもっと追い詰めるだけですから」

これで３０回目……っと。

これは長期戦を覚悟しておいた方がいいですね。

未来から来たならその手段は？

何でジオウと同じベルトを持っている？

何故未来のジオウはハーレムを築いたのか？

聞きたいことは山ほどありますから、気合いを入れてヤりますか。

「絶対に屈するもんか…!」

★

「もうらめぇ!」

知りたいことは大体聞けた。…けどゲイツはアヘり顔を晒しながらおねだりをしている。

…流石の私もここまでの行為を言葉に記すのはちょっと憚れるから控えさせてもらいましょう。

……さて、分かったことを纏めておきましょう。

Ｑこの時代に来た手段は？
Ａ簡単に言えばタイムマシンで時間を超えてきた。

Ｑジオウと同じベルトを持っているのは何故
Ａ気がついたら持っていた。恐らく『個性』だと思われる。
Ｑこの時代に持ってきた物はある？
Ａ万能型タブレットは持ってきたがそれ以外は何も
Ｑ何故未来のジオウはハーレムを築こうとしたのか
Ａ己の欲望を満たす為
Ｑ未来のジオウの姿はどんな感じ
Ａ基本女を犯していて、頭に紫の変なものを乗っけている
Ｑ変なもの？
Ａブドウみたいだった
Ｑ……ところで、その隠し持っている【エグゼイドライドウォッチ】は？
Ａ…隙があったんでスッてきました。

……商売道具取られてんじゃないですよジオウ。
ってかそもそもジオウは男の癖に隙がありすぎるんです。ズボンのチャックが開いていたり、この前だって机の棚が開きっぱなしでしたし、日記も置いてありました。
普通職場で書きませんよね？
しかも私の印象をメモしていましたし……。
・見た目は茶髪のロングにデカイ耳が特徴。
・男への性欲より恋愛の方が上回っている。
・ものっそいウザい。
・原作の芦戸以上に恋愛脳。
・毎晩のオカズはＢとＬの薄い本（本人談）
・これでも他の女よりましである。
・相手を油断させた上で叩き潰す戦闘方法。
何ですかこれ。

もう一度言います何ですかこれ！
原作ってなに!?
性欲より恋愛脳!?んなわけないでしょう！
あの人に近づく女性なんて私とここの職員と開発部の発目明くらいですからちょっと偏ってますよ！常識が！…確かにここのメンツでは私の性欲は控えめですが…。
ここがおかしいだけで他の人たちはちょっとオープンなだけで行動には移さないヘタレですよ！
……でも、他の女より良いってのは凄く（子宮が）キュンと来ちゃった。
……べ、別に！ジオウを恋愛対象で見ているとか、そんなんじゃないんだから！せ、性欲の対象でしかないから！
……と、我ながらツンデレヒロインみたいなことを考えていますと、
「おねぇさまぁ、はやくぅ！」
痺れを切らしたゲイツ（全身ビチョビチョ目がハート全裸）が私を押し倒してきました。
しかも、私の服を脱がそうとしてくるのです。
「ちょっ、ゲイツ止めなさい！」
私は慌てて止めさせようと声を荒げましたが、彼女は狂った笑みを浮かべて、言い放ったのです。
「ふふっ、遠慮しなくてもいいんですよぉ～。おねぇさまが教えてくれたきもちいいことを、おねぇさまにも感じて欲しいですから～」
それを聞いた瞬間、私は悟りました。
（喰われる……！）
と……。

★

【ｓｉｄｅ　ｏｕｔ】

その数秒後、『アーーッ』という声が部屋から聞こえてきて、ドアを開けると、全裸の電子の上にこちらも全裸のつやつやしている少女がのしかかっており、虚ろな目をしている電子が発見されたとかないとか。

…何にせよ、捕食者は明白であった……。

半熱半冷の騎士

【ステージ・セレクト！】
轟ブレイブのステージセレクトによって転移した場所は、テレビで見たことのある、馬鹿でっかいサッカー場。
俺と轟ブレイブはそこの中央で相対していた。
「変身してくれ、体育祭までには仕上げたい」
「んまぁそれに関しちゃ良いんだけどさ…」
俺はジクウドライバーとジオウライドウォッチを取り出し、まずベルトの方を腰に巻いた。
【ジクウドライバー】
「俺はもうちょい君と話したかったが」
「ンブッ…！くっ…流石にプロ。精神を揺すんのに長けてんな……」
「別にそんなんじゃ…。まぁいい」
ライドウォッチを回転させ、ライダーの顔を完成させた後に起動。
【ジッオウ…！】
そしてベルトにセットし、右手で叩くようにロックを解除。ライドウォッチが挿さっていない方を持ち、
「変身」
と呟き右に回した。変身音声が流れる。
【仮面ライダー！ジッオウ…！】
【ジカンギレード！ケン！】
「行くぞ」
変身が完了した俺はジカンギレードをケン状態で召喚し、轟ブレイブに向かって突っ込んだ。
『ガシャコンソード！』
『コ・チィーン！』
「…はぁっ！」
それに対して轟ブレイブは、ガシャコンソードを呼び出し氷モードに。
剣先を地面につけ、俺の方向に切り上げた。

すると、原作体育祭にて見せたドームを覆い尽くせそうなレベルの氷を形成。俺を氷漬けにしようと迫って来た。
【タイムチャージ】
【フィニッシュタァーイム！】
【5】
回避は勿論普通の攻撃も対策にならない為、
【4】
迎撃には必殺技クラスの威力が必要だ。
【3】
俺はライドウォッチの必殺技発動スイッチを入れ、ベルトのロックを解除し回転させる。
【2】
そして助走の勢いのままライダーキックを放った。
【タァーイムブレェーイク！】
「オリャァァァァ！」
”バキーン！”
【1】
氷は粉々に砕け、轟ブレイブの姿を再び視認。
「クソッ。やっぱこれじゃ終わんねぇか」
『カ・チィーン！』
【ゼロタイム！】
そう言いながらソードを炎モードに変更し、左手に持ち替え、低い姿勢から突きの動作を行う。
「喰らえっ……！」
”ボォォォォォォ！”
円形で氷と比べれば範囲も小さいが、速いし当たれば溶けそうな程の熱量を感じる。
【ギリギリ斬り！】
が、当たらなければどうということはない。
タイムチャージケンの特殊効果で少し反応が速くなった俺は、まさにギリギリのところで右斜め上の方向に避けた。

そして更に踏み込んで、上段から斬りかかる。
狙うは手首だ。
「上かっ！」
”ガキィン！”
「おっと防がれたか」
しかし轟ブレイブの防御が間に合ってしまいソードを取り落とさせることは出来なかった。
まぁ、それで終わりじゃないけどな。
俺はがら空きの胴体に蹴りを放ち、ジカンギレードを【ジュウ】に変え3発ほど撃ち込む。
「がっ!?」
吹っ飛ばされた勢いでゴロゴロ転がっていたが、
『コ・チィーン！』
「ぐっ、ぉあっ！」
片膝立ちまで体制を整えて自らの前に分厚い氷の壁を生成した。こっちから向こうが見えないようにワザと透明度を落とす工夫もしている。
『カ・チィーン！』
”ジュオオオオオオッ！”
だが、防音までは完璧とは言えないな。
ま、こればっかりは仕方がない。ライダーの武器の宿命だ。
（さて、何かを焼いた音が聞こえたが…どうくるんだ？）
てっきり『透明化』のエナジーアイテムで奇襲してくると思ったが……。
とりあえずは何が来てもいいよう、ジカンギレードを構えておく。
氷の壁を壊そうかとも考えたが、何か罠があるかもしれない。
例えば、ワザと何かを燃やす音をさせて『何かを準備しているんじゃないか』と察した俺が、後手に回らないよう焦りながら氷を破壊する俺に不意打ち。……とかな。
それとも、ただ単に休憩しているのか。
「どちらにせよ、この壁は壊しとこう」

【タイムチャージ】
轟ブレイブの行動が後者だった場合は体力が戻らないうちに戦闘に持って行かなきゃだし。
【5、4】
前者だった場合は…まぁ、臨機応変に対応しよう。
【3、2、1】
【ゼロタイム！】
【スレスレ撃ち！】
ジカンギレードの引き金（トリガー）を引くと、ピンクの弾丸が放射され、氷の壁に大きなヒビを入れていく。
だが、全壊には至らなかった。
「…なら、もう一度――！」
俺が再びタイムチャージのボタンを押そうとした瞬間。
”ボオオオオオオオオオオオオオオオッ！”
世界が紅に染まった。
「ドアッチィィィィィィィィィィ!?」
俺はあまりの熱さと、体に纏わり付いた炎を消そうと地面に体を擦る。
なんかもうビックリし過ぎて一周回って冷静になったのか、気が狂ったのかは分からんけど、何となく状況は理解した。
恐らく轟ブレイブは地面からあの炎の攻撃、しかも、威力を見る限り必殺技を使って攻撃してきたんだ。
多分、最初の何かが焼ける音の正体は地面。
地面に向けて炎の突き技を放って穴を開け、大体俺がいる位置まで地中を移動。
そしてその位置で『タドルクリティカルフィニッシュ！』を発動させ俺を攻撃…。
（かんっぜんにやられたな…）
一杯食わされた。

エナジーアイテムの存在ばかり頭が行って、ここまで考えつかなかった。
いやそもそも、エナジーアイテムに頭が行ってなくても思いつかなかっただろうな。
ヒーロー科とは言え学生が、一応プロの俺にここまでダメージ与え、発想でもこちらの上をいった。これはもうあいつの勝ちだな…。
「轟ー。聞こえるか？【降参】！俺の負けだ！」
俺は地面に大の字で寝転がりながら声高らかに、叫んだのであった。

俺の…私のオリジン【前半】

「轟ー。聞こえるか？【降参】！俺の負けだ！」
俺が焼き開けた穴の奥からジオウの声が聞こえてきた。それを聞いた俺は……いや、私は。
「…やた…！やった！やったぁぁぁぁぁぁ！」
小さな声で叫ぶという我ながら器用な事をやりつつ小躍りしていた。なにせ、どうやったら勝てるかをずっと考えてできてやっと叶ったのだから。
もちろん、実力がプロに届いたってことの嬉しさもあるが、それ以上に喜ばしい事が私にはあるのだ。

★

それは、約１０年ほど前の話。
私の個性が【半熱半冷】と判明した時のことだ。
その時の私は自分の力を試したくてウズウズしていた。だから、親父に頼んで個性を使うことができる施設に連れて行ってもらって、実際に使ってみた。
左の、炎を。

その次の瞬間にはその部屋は大火災と化していた。

「……!?」
「これは…っ！とんでもない力だなぁっ、焦凍！だがやり過ぎだ！」
所々溶けている場所があったのを覚えている。
恐らく、マグマも形成したんだと後で察した。
これには流石の親父も慌てて私を助けに来たが、当時の私はそれに気付かず、右の氷を使って消化しようとした。

そしたら今度は大爆発が起きた。

その部屋丸々無くなったのだ。
所謂、水蒸気爆発とやらが発生したのだろう。
…ただ、不幸中の幸いと言うべきか、そこは親父が個人的に管理していた場所であり、人がいなかった。
が、その代わりに親父が全治何ヶ月単位の怪我を負ったのだ。
……私を、爆発から庇ったせいで。
この事は、親父が事実を捻じ曲げ、ヴィランにやられたとマスコミに報道させられる。
4、5歳の娘の個性暴発によって大怪我なんて報道されたら親子共々今後の人生が狂いかねないし、色んな所から狙われるだろう。
その辺はしっかりと考えているあたり流石だなって思った。
……そりゃあ、当時の私からしたらショッキングな話だったさ。
しばらく家に引きこもって、誰とも会わない生活を送ったし、飯も喉を通らない。
唯一暖かくない蕎麦は食べれたけどな。
…で、お姉ちゃんが
「焦凍…。お姉ちゃんと一緒にお外で遊ぼ…？」
私を気分転換に外へ連れ出してくれた。
最初は渋った私だったけど、お姉ちゃんに真顔で、
「太っちゃうよ？」
こんな恐ろしいことを言われたら出かけるしかないだろう。
…話が逸れたが、ともかく出かけたわけだ。
近場の公園や、ゲームセンター。オモチャ屋。
コンビニやスーパーでアイスを買って2人で食べたこともあったなぁ……。
オモチャのアクセサリーも買って貰ったし。
いや『太る』って言われて外に出たのにアイスを食べるなんて矛盾しているが。
……まぁ、そうやって出掛けている内に、少しずつ元気が出てきたんだ。お姉ちゃんには本当に感謝している。

…そして、何日か経って、また公園に行った。
お姉ちゃんは学校の用事があるらしく、今日は黙って一人で外出してみたんだ。
そしたら……。
《ガァガァッ！》
「いやっ!?こないでっ！危ないよぅ！」
私の光るアクセサリーに反応したのか、カラスに襲わた。…けど、そのカラスは普通のやつじゃなかった。
「なんでこんなにおっきいのぉぉぉ?!」
実に2メートル以上のでっかいカラス。
動物にも個性が宿ると聞いた事はあったけど、実際に見るのは初めてだった。…初めて見たのが襲われる時なんて、私もついてない。
だけど、今から見たらそれはとんでもない幸運だった。…何故かって？
【仮面ライダー！ジッオゥ…！】
「待たせたな！」
《ガァッ!?》
――颯爽とカラスに飛び蹴りをかましながら登場した、私のヒーローと出会えたから。
「大丈夫か、小さなお嬢さん」
「ひゃ、ひゃい！」
ビックリと男と思われる人と出会ってめちゃくちゃ緊張したのを覚えているが、こちらを振り向かず、敵に集中する師匠。
それもそのはず。
《ガァァァァァァ！》
「うわっタフネスだな！」
まだカラスは死んでいなかったから。
しかも、地上じゃ分が悪いと悟ったのか、強烈な風を起こして空に飛び立ち、こちらに隙がないかを伺っている。
不安になった私は師匠に話しかけた。
「ど、どうするの？カラスさん、お空に……」

「ん、心配すんなよ。空中戦くらい、俺だってできる！」
　すると、師匠は白とオレンジの丸い何かを取り出して絵柄を、顔が揃うように合わせたのち、てっぺんのボタンを押して、ベルトにつけて回した。
【フォーゼ！】
【アーマータァーイム！】
【3．2．1．フォーゼ～！】
「すっごい！ロケットになちっちゃった！」
　あまりにロケットロケットした見た目に当時の私は大興奮。舌を噛んで痛い思いをしつつも、師匠に憧れの視線を送る。
「まあ、安心して見てろ。すぐに終わらす」
　ボオオオオオオ！という発射音と共にロケットと化した師匠がカラスに激突。

「宇宙に、行ってやるぅぅぅぅぅぅぅ!!」

「行ってらっしゃぁぁぁぁぁぁい！」

　小さな手をブンブン振って師匠を見送る私。
　引き込もっていたのはなんだったのかと思うほどのテンションの上がり方である。
　…その数十秒後、遠い空で爆発が見えた。
　…まぁ、そこでトラウマスイッチが入った私はガタガタと震え出した。
　爆発が、どうも苦手になっちまったらしい。
「ふぅ、お片づけ終了っ！……って、大丈夫か小さなお嬢さん。ヤケに震えているが……」
　師匠の、簡単な質問に対しても答えらなかった。
「……何か、嫌な事でもあったのか？」
　はいか、いいえで答えられる質問に気を使って変えてくれた師匠。とりあえず私は首を縦に振った。

「……俺でよければ相談に乗る。そこのベンチで話そう」
そう言いながら変身を解いてベンチにどかっと座る師匠。……私は素直に隣にポスンと座って、ボソボソと話し始めた。
私の、苦悩を。

俺の…私のオリジン【後半】

【ｓｉｄｅ　約１０年前のジオウ】

なんやかんやあって４、５歳の轟に出会った。しかもカラスに襲われるところを助けた形で。

そんで、カラスを宇宙で始末した後に話しかけたらブルブル震えだしたから話を聞くことにした。

……が、内容が想像以上に重かった。

まだ顔に火傷の後がないから、家族と喧嘩したとかそんな軽い感じだと思ってたのに。それにこれ、明らかに原作より強化されているよね？

性別聞いたら『女』って答えたし、男女違うだけでこうも変わるのか？

「お父さんも怪我しちゃったし、こんな個性欲しくなかったよぉ…」

…うーん、何とかしてあげたいな…。だってこのまま放っといたらヴィランに堕ちそうだし。

用はこの子の体に対して個性が強すぎるんだろ？

レベル１の村人にレベル１００の勇者の力を与えたってその力で自滅するだけだし。

ん？レベル……？

あ、そうだ。いい方法思いついた。……けど、あまり乗り気がしない。

だって、それは俺の力の一部を手放すことになるのだから。

でもこのまま放っといたら原作崩壊しそうなんだよなぁ。…ま、なるようになるべ。

「……いい方法がある」

俺は、そう切り出した。

★

【ｓｉｄｅ　今の轟】

「おじさんそれ本当!?」
「おじっ……!?そ、そんなに老けて見えるのか…。まだ２０代なのに…」
師匠は幼い私の言葉にひどく落ち込んだ様子で肩を落とした。
けれど、好奇心の塊だった私は率直に言った。
「教えて！わたし、なんでもするから！」
「ん？今なんでもって…」
「はい！なんでもです！」
後から考えると、ちょっとヤバいセリフである。
師匠は一つ咳払いをして気分を切り替えたのか、真剣な表情で、
「俺と契約して仮面ライダーブレイブになってよ」
と言ってきた。
「かめんらいだー？」
勿論当時の私が仮面ライダーを知るはずもなく、キョトン、と首を傾げる。
そんな私の様子を見て察したのか、仮面ライダーについて丁寧に分かりやすい説明をしてくれた。
「仮面ライダーは、昔のヒーローみたいなもので、皆の憧れだったんだ。そして、君にそのライダーの１人である『仮面ライダーブレイブ』になってもらいたい」
「どんなのなの？」
「えーと、能力は炎と氷を操れる剣を持って戦う、かな。…でも、肝心なのはそこじゃない。君は、【レベル】を知ってるか？ほら、ゲームとかの」
「なんとなくは分かるけど…」
「『仮面ライダーブレイブ』にはその機能が採用されている。確か、最大レベルが１５０とかだったかな？…で、君の力もこれから成長していくに連れてそのくらいになると思う……いや、下手したらそれを超える。けど、君の場合は【個性の強さ】のスタートラインが既に５０くらいに達しているんだ。こんなの成長しきる前に君の体が壊れてしまう」

まだこんな幼い子供にするには難しい内容で、少しクラクラしつつも師匠に質問をする。
「え、ええと…、じゃあ、どうするの？」
「仮面ライダーブレイブにもレベル1や2は存在する。…もしかしたら、君の個性が仮面ライダーの力に引っ張られてレベルが君の体に合うレベルまで落ち着くかもしれない、ってことだ。ま、用はとにかく変身しろってことだよ」
そう言いながら師匠は青と銀の丸い何かを取り出して、絵柄を揃えて私に差し出してきた。
「それは【ブレイブライドウォッチ】。俺が使えばアーマーになるが、持ち主が変わると、そのライダーの変身するためのアイテムに成りかわるらしい。…まだ俺も試してないが、やり方は知ってる。ただ、なりたい自分を思い浮かべて、そのボタンを押すだけさ」
「……」
私はその【ブレイブライドウォッチ】を手にとって、なりたい自分、とやらを考えてみた。
……頭の中に浮かぶのは、先程の師匠とカラスの戦闘の風景と、自分の個性で傷つけた父親の姿。
――――――自分も、師匠のようにヒーローになって人を助けたい。その為に、自分の個性を制御して、誰も傷つけないようになりたい！
……私がこの結論に至るまで、そう時間はかからなかった。
覚悟を決めてボタンに親指を立てて、一呼吸置いて、ウォッチを起動させた。
【ブレイブ！】
〝ズパァァァァン！〟
「わっ!?」
「おわっ!?」
するとブレイブライドウォッチが鋭い光と共に妙な音を出した。
…やがて、視界がクリアになる。
……私の手にはブレイブライドウォッチが消え、代わりに派手な色

をして、何かをセットできそうな穴が空いたアイテムと、その派手なアイテムの空白にセット出来そうなものが６個膝の上にばら撒かれていた。
「……よし、じゃ、早速変身してみよっか」
「えっ……？」
「俺がレクチャーするからさ、ね？」
師匠は私を立ち上がらせ、派手なアイテムを腰に押し付ける。
すると自動でベルトが巻かれてピッタリフィット。
……口頭で変身の仕方を教わり、私は『仮面ライダーブレイブ』として、初変身を迎えることになる。
『タドルクエスト！』
小さい方のアイテム…ガシャットと呼ぶ青いものの起動ボタンを押した後、顔の前まで移動させ、クルッとひっくり返し、決め台詞。
「変身！」
ひっくり返したまま派手なアイテム（ゲーマドライバー）にセットする。
『ガシャット！』
青い騎士のキャラクターをタップして、後はそのまま待機。
『レッツゲーム！メッチャゲーム！ムッチャゲーム！ワッチャネーム？』
『I，m仮面ライダー！』
変身音声が流れ終わり、全身に力がみなぎるのを感じると共に、個性が殆ど使えないことが直感的に分かった。
……でも、一つ文句を言うなら。
「ねぇ…なんでこんなずんぐりむっくりなの？」
２頭身しかないから機敏に動けない。
当時の私は怒りすら感じていたと思う。
「ふぐっ……！」
「あ！今笑った！」
「いやー悪い悪い。そのレバーを引けば戦えるような体型になるからやってみ？」

ムスッとしながらも指示に従ってレバーを展開させる。
『ガッチャーン！レベルアップ！』
『タドル巡るタドル巡るタドルクエスト～！』
「お、おぉぉお！」
その言葉に間違いはなく、普段の身長の何倍もの大きさになった自分にかなり興奮した覚えがある。
『ガシャコンソード！』
「おおおおおお！」
自動で剣も出てきてさらにテンションが上がる。
試しに左手で持って個性を発動させたけど、軽く炎を纏うくらいでそれ以上はどんなに頑張っても炎は吹き出したりしなかった。
「……やた！やった！やったぁぁぁぁぁ！」
すごい！本当に出ない！
もうテンションマックスで小躍（エイサイハラマスコイ踊り）りしてた。
「お、おい……っ！その姿でそれはやめてくれっ！腹がよじれる…！」
「むっ！この踊りをバカにしたな！いくらおじさんでも許さないよ！」
昔のアニメでものすごく気に入っていたダンスだったからかなりカチンときた。因みに今でも踊れる。
「えいえい！怒った？」
「怒った！」
そこで更に小突いてくるもんだから、思わずチョップしに掛かっちゃったんだけど、あっさり躱されて地面に激突してしまう。
「俺に勝とうなんざ１０年早いわ！」
まあ、沸点の低かった私はその師匠の言葉に、こう返しちゃったんだ。
「じゃあ１０年以内に勝てたら結婚して！」
「……はい？」
まぁ、そこから壮絶な言い争いの末にそれを認めさせた訳だけど、

今思い返してみても、自分の行動なのに訳が分からない。
……けど、結果オーライだった。
師匠を超えるため師匠に特訓してもらったり、疲れた時に互いに労いの言葉をかけたり、一緒に街に繰り出して買い物をしたりする内に、その…あれだ。
惚れちゃった。
だから、私は今日……約束の10年が後1日で経ってしまうという日の為に全力を尽くしてきた。

……そして、勝利した……！

ニヤニヤが止まらない！
師匠が、ジオウが、仮野面太（かりのめんた）が！
私だけの者となる！これでやっと1つになれる！
合法的に襲い掛かれる！
ありがとう幼い私ッ！
君はもう1人の私のヒーローだっ！
……あ、でも、もし浮気でもしたら…。
いやしないと信じているけど、もしやったら…。

私だけしか見れないよう。

私以外何も考えられないよう。

調教してあげなきゃね。

フフフ……。あぁ、とても楽しみだ。

……あ、そうそう、私だけしか見れないってことは、師匠を独占できるってことだ。

まさに、私だけの特権。
調教した師匠の姿は私以外には絶対に見せない。
たとえそれがどんな奴でも。
……そう、例えば。

これを読んでいる君らにもね。

私の強くてニューゲーム。俺の決意のコンティニュー。

「……！」

ゾッ、とする程に大きな意思がゆっくりとこちらに近づいてきやがる。

取り敢えず変身を解いて大の字で寝ていたところを起きて、警戒態勢を取る。

「師匠…お待たせ」

「別に待っていないが？」

歓迎もしていない。てか怖い。変身を解いていて、目にハイライトがない状態が一番怖い。

「なんで？ずっと待ってたでしょ…？１０年間も…」

「俺は今を生きる男。そして何より知り合いの急な口調の変化が気になる男」

「嘘だ！」

うぴゃぁ。（ビビりすぎて狂った）

なんでこんなに怒ってんのぉ!?（戻った）

「約束したでしょ……！師匠を１０年以内に勝てたら結婚するって！そして今日がその締め切り日！私は見事に勝利したじゃない！」

わあこおりとほのおがたくさんでてるぞぉ。

行ってる場合か。

誤字ってる場合でもねぇ。

……しかし、そんな約束してたっけか？

仮にしてたとしても、４、５歳の戯れ言だし。ってか轟が１０年も前の約束に固執してる方に驚いた。

「あー。あのな轟、一体いつ俺がそんな約束をしたんだ？」

「９年と３６４日と２０時間３２分１２秒前」

あの、質問に答えるたびこっちに一歩ずつ進んでくんのやめて？

……あっ、そうだ！

「ワォ。やけに正確だな。……だが、仮に言っていたとしても証明するものがないだろ？」
証拠だしてみろやオラァ！
流石に動揺しろやオラァン!?
……いや最低か。
完璧にアレじゃん。結婚をあやふやに誤魔化してるヘタレ男じゃん俺。
けど、流石に結婚なんて出来ないし。
俺３０代後半なのに轟は１５歳位なんだぜ？
犯罪の匂いしかしないわ。
……で、そんな俺の問いかけに轟は、一瞬キョトンとしたものの、ニコッと笑って
「あるよ」
無慈悲にその言葉を放った。
「へ、へぇ？本当かぁ？」
顔には出さないが、内心冷や汗が止まんない状態だ。…また一歩踏み出して来る。
「正確には、『証明する人』だけどね」
「人？いやいや、あの場に野次馬なんていなかったぞ？それとも遠くから誰かが撮影でもしていたか？」
「ううん。そんなちゃちなもんじゃない、もっと大勢にだよ？」
…そしてまた一歩こちらに踏み出して……あれ？振り返った？
「なぁ、そうだろ読者さん？」

「……敗北者？」
「湧くなエース！戻れ！……って、そうじゃない。いい？師匠。私達の、この会話を別次元から覗いている人がいるってことだよ。多分今も、どっちかの思考を見ていると思う……!?」
ええ…？（困惑）
ちょっと何言ってるかわかんないっすね。
…と、前世の俺なら答えただろうが、今は違う。
なにせ、ここはヒロアカの世界であり、個性でなんでも出来ちゃう…ってのは言い過ぎだが、大概は何とでも出来る世の中なのだ。
もしかしたら、暇人プー太郎が個性を使って思考を読み取り、２チャンネルにて読み取ったものを書き込んでいるのかもしれない。
しかもそれは約１０年前から行われていて、その時のログが残っている、と。
轟はそういうことを言いたかったのだろう。
…成る程しっくりくる。
何せ、自惚れる訳じゃないが、俺は約１０年前から活動を始めてそこそこ活躍していたし、今日に至るまで殆ど負け無しだった。
当時も話題性はあったし、そういうのがあってもおかしくないかもしれない。
あとはどうやって覗きを辞めさせるか、だな。普通にネットを探して通報でいいか？
いやでも、１０年間もよく俺たちにバレなかったな。うちの事務所エゴサーチしてるし、それにも反応しなかったってことだし。
だったら普通の解決方法は通用しないか。

……あれ？でも、轟はログが残ってると確信した上で俺に話を振っているんだよな？
だったら、その出所も轟が把握している筈！
クッソ有能だな俺の弟子！
「よし、言いたいことは大体わかった。今から戻って対策取るぞ」
「……！うん…そうだね…！」
「えっ!?ちょ、な、何で泣いてんの!?」
え待って本当にわかんない。俺がただ一言『対策を取ろう』と話しただけで何でこうなる!?
なんか失言でもしたか？してないよな!?
いや、もしかしてノリで『敗北者』と言ったのがマズかったか！
「……ごめんね…ちょっと、感極まっちゃって…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ長かったぁぁぁぁぁ……!!」
長かった……？
え、待って、何が長かったの？もしかして俺の思考が？マジでか。
「あの、轟？なんで泣いてんのか全くもって検討がつかないんだが……俺、なんかやらかしたか？」
取り敢えず聞いてみるしかない。
「…今の師匠はやらかしてない！…ただ、説明するとちょっと長くなるってか、ややこしいんだよね」
「……なるべく簡潔に頼む」
「了解」

★

…簡潔にといったのに、結構話し込んでしまったが、纏めるとこんな感じか。
【剣と魔法のＲＰＧライダーの力を得たことにより、セーブとロードとコンティニュー機能が使えるようになった。
しかし、セーブはリセットできない。
セーブポイントは体育祭前の俺との戦闘直後の「なぁ、そうだろ読者さん？」のセリフ後。

この世界では俺と轟は、自分達を観察している邪神を認識していたそうだ。
本来の仮面ライダーブレイブにない機能が加わっているのは邪神が手を出したからしい。
更に言えば邪神は、俺を都合のいいように傀儡人形にしてたらしい。
１週目は更生施設エンド
２週目はオーマジオウ（俺）殺害→自殺エンド。
３週目はゲイツと共にオーマジオウ回避ルート。そして本物のジオウ（緑谷出久）と共に最善最高の魔王へ。
……ここ、話聴いててガチでビビった。
出久君ジオウだったの!?ってかアナザージオウみたいな俺がいるのにジオウとして存在できるのね……。
４週目
望んでもいないのにまた戻ってきた→恐らく、今まで自分達を観察していた邪神の仕業だと感づく。それを引きずり下ろすための戦いが始まる。
５～１９週目（ここは流石に長すぎたからカット）
試行錯誤し、何とか自分達の土俵に引きずり下ろす。そして迎撃したところで世界が終わる。この時に邪神の死をセーブ。ロードしても蘇らせないようにした。
２０週目↑イマココ
本来なら『なぁ、そうだろ読者さん？』の後は強制的に戦闘になってしまうため、戦わない選択をしたことに、感極まって泣いてしまったらしい】
……壮大、だな。
ふざけているような感じもしないし、エイプリルフールでもない。
それに目の前の轟からは。１５歳の少女ではなく歴戦の戦士、レジェンドライダーとしての風格みたいなのを見て取れる。
オールマイトも似たような雰囲気を纏っていたので間違いない。
「ねぇ、師匠…師匠はこれから何をしたい？」

「ん…？」
そんな轟が口を開き、疑問を投げかけてきた。
「師匠の前にはこれから先、沢山の障害が立ち塞がる。邪神がいなくなったことで新たな敵が出るかもしれないしね。今まではそれに強制的に立ち向かってたけど、今回は、逃げて好きなことして、誰にも縛られずに、自由に生きることもできる……師匠は、これからの事に立ち向かうか、それとも逃げるか、どっちがいい？……ここは、これからの人生における、重要な分岐点だよ」
「……なんだ、そんなことか」
俺が、何のためにこの世界に来たと思ってる。
「俺はな、ずっと、人を助ける仮面（ヒーロー）ライダーになりたかったんだよ」
高校生になっても、大好きだった作品の主人公たちのようになりたい。そう考えてたら、居眠り運転の車に轢かれて、あの世で神さまに出会って。転生して。
「けど、俺はそんな憧れには程遠い」
結果的に、棚ぼたで手に入れた力。
手に入れたばかりの頃は、その力に酔いしれて無責任な救済を行い、間接的に俺が殺してしまった…ということもあった。
その事件は、あの【オールフォーワン】も関わっていたため秘匿にされたが、それでも被害者家族の悲しみが晴れるわけじゃない。
「俺は、自分の選択で汚してしまった仮面（ヒーロー）ライダーの責任を取る。二度とあんな事を起こさない為に。だがら、ここで逃げるわけにはいかない」
俺は完全な善人にはなれないだろう。
オールマイトのようなを救済を行えない。
仮面ライダーの様なメンタルは持てない。
だが、理想を目指すことはできる。
「俺は！最善の魔王になって、障害も過去の自分も乗り越えて行く！そう、Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａだ!!」

最後はテンションに任せて何言ってるか自分でもわかんなくなったが、改めて言わせてもらおう。

――――――これは俺がジオウの力使いながら変態から逃げまくり、最善の魔王を目指す物語だ。